

菅原道真の詩に投影されている白居易・元稹の唱和詩について（その二）

——『菅家文草』卷三所載「正月十六日、憶宮妓蹋歌」、「聞群臣侍内宴賦花鳥共逢春、聊製一篇、寄上前濃州田別駕」二詩の解釈をめぐって——

焼 山 廣 志

筆者は前稿（注一）で「菅原道真の詩に投影されている白居易・元稹の詩について（その一）」として菅原道真の『菅家文草』（卷三所載の「晩春遊松山館」を取り挙げ若干の私見を述べた。そこではこの作品を元稹・白居易の唱和詩を通して両者からの同時投影が窺えるものの一例として取らえることが出来るのではないかと結論付けた。今回はその点を、対象とする作品を広げて更に考察を深めたい。

今回取り挙げる作品は前稿の作品と同時代の『菅家文草』卷三所載「正月十六日憶宮妓蹋歌」と「聞群臣侍内宴賦花鳥共逢春、聊製一篇寄上前濃州田別駕」の二詩である。殊に後者の詩は詩題からも窺える通り義父である嶋田忠臣との唱和詩であることから、道真の詩、忠臣の詩両者の詩も同時に考察をしながら白居易・元稹からの詩の投影関係を探ってみたいと思う。

これらの詩の製作された年時は前者の「正月十六日憶宮妓蹋

歌」が『日本紀略』に「寛平元年 正月十六日戊申。於三東京「有」踏歌。申剋天皇御「南殿」とある事項を指すものと考えられる。故に（但し、寛平改元は四月二十七日なので、この時は仁和五年が正しいと思われる）、仁和五年（八八九年）道真四十五歳の時、讃岐守として三年目の新春を讃岐の地で迎えた時の心境を詠んだものである。一方後者の「聞群臣侍内宴賦花鳥共逢春、聊製一篇寄上前濃州田別駕」は同じく『日本紀略』に「寛平元年正月廿一日。内宴。題云。花鳥共逢春。序者少内記藤原春海」とある事を讃岐の地で伝え聞いて詠んだものと思われ、菅原道真と嶋田忠臣はこの詩をめぐって二度にわたって唱和詩のやりとりをしており後の唱和詩の詩題に「菅讃州重答拙詩、頻叙花鳥逢春之意。四月晦先使去。五月望、後使来、不遠千里交馳尺題更亦抽懷、押韻報上」とあることから新聞一美氏が論じられているように（注二）忠臣の前の詩は「初めの使いが讃岐に去った夏四月末日の少し前」であることが判明する。とすれば道真の本稿で取り挙げる詩はそれ以前に忠臣に送っ

た詩なので仁和五年一月二十一日以降四月以前という事になる。
つまり今回取り挙げる二詩は作品の製作時期に余り間隔のない、ほぼ同時期に詠まれた作品と推測されるのである。そこに道真の詠作姿勢にある類似した傾向を指摘する事が出来るのではないかと考える。次章でこの二作品を詳細に考察してみたい。

二

まず「正月十六日憶宮妓蹋歌」を取り挙げる。

284 正月十六日、憶宮妓蹋歌

星居在北濶天濶 星居北に在り 天なる濶ぞ濶き

遣意宮人整玉簪 意遣る 宮人の玉の簪を整へらむことを

此夜應同新月色 此の夜 新月の色 同じかるべし

他郷不似舊年心 他郷にして 舊年の心に似ず

舞非春夢難行見 舞ひは春の夢にあらず 行きて見ること難し

歌是昔聞便臥吟 歌はこれ昔聞くところ 便ち臥しながら吟ず

每屬佳辰公宴日 佳辰公宴の日に屬ることに

空空濕損客衣襟 空空濕ひ損す 客衣の襟

*作品番号・本文・訓みとも川口久雄氏校注の岩波古典文学大系本に従う。

この詩の詠作背景については川口久雄氏の詳細な論述がある。

(注三)。詠作年時は一章で述べたように仁和五年(八八九)、道真四十五歳、讃岐守として着任して三年目を迎えた時期である。「踏歌」そのものの考察も先の川口久雄氏の論に詳しい。ここでは詩の鑑賞上での一般的な説明として『日本国語大辞典』の記事を引用してみる。「踏歌」とは「踏歌の節会」の事を意味し「平安時代、正月に宮廷で踏歌を奏する公事。初め十六日に豊楽殿で行なわれた。のち紫宸殿において一四日または十五日に男踏歌を、一六日に女踏歌を行なった。男踏歌は、天皇が出御して王卿に酒を賜い、次いで国栖が歌笛を奏し、賛を献じ、大歌所の奏歌ののち舞人が踏歌を行なう。その間も宴が続き、終わって王卿以下に禄を賜わる。女踏歌もほぼこれに準ずる。」とある。川口久雄氏の考証によると(注四)「道真は仁和二年(八八六)正月十六日紫宸殿にて行なわれた踏歌の節に参列して以来これにあずからない」とある。つまり讃岐国守時代三年目の道真にとって京よりはるかに離れた異郷の讃岐の地で、この踏歌の節会が取り行なわれたことを伝え聞き過去を回想している詩内容なのである。

次にこの詩の通釈を以下に試みる。「北の夜空には星が輝いており(北極星が輝き)天を仰ぎみれば果てしなく広い。正月十六日、この日を思いやると今日は宮女たちが舞の為に玉簪を整えるのに余念のないことであらう。今日の出たばかりの(十六日の)月は踏歌の行なわれている京都でも客居している此の地でも同じように照り輝いているはずだが、私の讃岐での今の

心持ちは、京に居て宮妓の舞を目のあたりにしていた時とは全く異質なものになってしまった。宮妓の舞はかない春の夢の出来事ではなく現実に関わり、京の宮中で行なわれているはずだが私の今の状況では見る事もかなわない。踏歌で歌われる歌詞は私の今迄慣れ親しんできたものだが、今日の私は客居の讃岐の地で臥したままで口ずさんでいるのである。このように佳節公宴の日になる毎に、私は一人、我が身の不運を嘆き、むなし涙を流して客衣の襟をしめらせてしまうのである」となるのではないかと考える。

更に表現内容・語句の分析に移してみる。一句目の「星居在北欄天濤」の表現には川口久雄氏にも指摘があるが（注五）『論語』「為政」の次の一文が踏まえられている。「子曰、為政以德、譬如北辰居其所而衆星共之」、この文中の「北辰居其所而衆星共之」は「政治をなすに徳を以てすれば天下が之を中心として帰する喩。北辰即ち北極星は一定の場所に動かないでいても衆星がこれを中心として回転することからいう」（『大漢和辞典』より）として引用される常套句である。一方、五句目の「春夢」は「物事のはかないことの喩」として『白氏文集』の中でも「來如春夢幾多時。去似朝雲無覓處」（「605花非花」）や「轉似秋蓬無定處」、長於春夢幾多時」（「1273蕭相公宅遇自遠禪師有感而贈」）等散見している。

次に三句目と四句目の対句表現に注目してみる。三句目の

「此夜應同新月色」の表現から想起される詩は、白居易の次の「八月十五日夜、禁中獨直對月憶元九」である。この詩を以下挙げてみる。

0724 八月十五日夜、禁中獨直、對月憶元九

銀臺金闕夕沈沈。	銀臺金闕	夕に沈沈
獨宿相思在翰林。	獨宿	相思うて 翰林に在り
三五夜中新月色。	三五夜中	新月の色
二千里外故人心。	二千里外	故人の心
洛宮東面煙波冷。	洛宮の東面	煙波 冷かに
浴殿西頭鐘漏深。	浴殿の西頭	鐘漏深し
猶恐清光不同見。	猶ほ恐る	清光同じく見ざるを
江陵卑濕足秋陰。	江陵は卑濕にして	秋陰足る

* 作品番号・本文・及び訓読文は岡村繁著の『新釈漢文大系 白氏文集三』に拠る。

この詩の詠作背景として岡村繁氏は「八月十五日の夜、白居易が宮中に一人で宿直し、中秋の名月を見て、元稹を憶って詠んだ詩である。時に元和五年（八一〇）、三十九歳の白居易は翰林学士として長安におり、親友の元稹は左遷されて湖北の江陵にいた」と説明されている。（注六）同じく通釈も引用する。「ここ翰林院や隣金鑾殿が深い夜色に吸い込まれてゆく頃、

私は翰林院に一人宿直して君に思いを馳せている。八月十五日中秋名月の夜、出たばかりの満月の姿を眺めるにつけても、二千里の遠方にいる君の心情が偲ばれる。そちらの江陵の役所の東の方では、もやや波が月光を受けて冷たく光っているであろう。こちらの宮中の浴殿の西側では、時刻を告げる鐘や水時計の音が夜の底に深々と刻まれていく。今夜君もきつとこの名月を見ているであろうが、それでも私はなお心配する。この清らかな月光が、そちらでは私と同じようには見えぬのではないか。なぜなら、君のいる江陵は低湿地で、いやになるほど秋の空も曇りがちだというから」(注七)

この白詩の中の三句目、四句目の表現「三五夜中新月色／二千里外故人心」が名句として日本人の愛唱するものとなった事は既に岡村繁氏の御指摘の如く(注八)『千載佳句』や『和漢朗詠集』に留まらず和文にも多く採られている所である。ここで道真の先の詩に目を移すと三句目の「此夜應同新月色」の表現にこの白詩の三句目「三五夜中新月色」の投影を、又四句目の「他郷不似舊年心」に白詩四句目の「二千里外故人心」の投影を指摘するのは容易である。ここで肝要なのはこの白詩の表現を道真がどのような姿勢で摂取しているのかという点である。確かにこの白詩の詩内容を吟味しても道真の句のこれ以上明らかに投影関係を指摘できる箇所はないとすれば、これは一種の、漢籍の秀句を摂取した「断章主義」的な句作りと看做せそうである。

ところがこの白詩が元稹との唱和詩であるという事に注目すると、又別な視点で投影関係を論じることが可能になるように思う。

ここで、この白詩との唱和詩である元稹の詩を以下に取り挙げてみたい。

0484 酬乐天八月十五日夜禁中獨直翫月見寄

一年秋半月偏深。	一年秋半ばにして	月偏へに深し
況就煙霄極賞心。	況んや 煙霄に就きて	賞心を極めんをや
金鳳臺前波漾漾。	金鳳臺の前 波 漾漾たり	
玉鉤簾下影沉沉。	玉鉤簾の下 影 沉沉たり	
宴移明處清蘭路。	宴 明處に映して	蘭路を清めたり
歌待新詞促翰林。	歌 新詞を待ちて	翰林を促る
何意枚皋正承詔。	何の意に枚皋 正に詔を承らん	
瞥然塵念到江陰。	瞥然として塵念	江陰に到る

*本文は中國古典文學基本叢書『元稹集』上冊に拠り訓は筆者が試読した。

この詩は花房英樹氏の考証によると「元和五年(八一〇)江陵に貶せらる、土曹參軍。三十二歳」とある。(注九)この詩は先述の白詩に唱和したもので脚韻も白詩の「沈・林・心・深・陰」と同語を自作に使っている。詩句内容を更に分析してみる

と一、二句目の「一年秋半月偏深／況就煙霄極賞心」は先の白詩の七、八句目「猶恐清光不同見／江陵卑濕足秋陰」を承けた内容になっている。三句目の「金鳳臺前波漾漾」は白詩の五句目で「渚宮東面煙波冷」と元稹の居る江陵の風景を想像して詠じているのを承けて元稹も江陵の情景を詠っているものと思われる。一方、四句目の「玉鉤簾下影沉沉」は白詩の六句目「浴殿西頭鐘漏深」と長安の情景を詠じているのを承けて同じように詠じている表現と取らえてみる。次に五句目の「宴移明處清蘭路」の「清蘭路」の表現には『文選』の謝希逸の「月賦一首」にある「遇清蘭路」、肅桂苑」等の表現が踏まえられている箇所ではないかと考えられる。又、七、八句目の「何意枚臯正承詔／警然塵念到江陰」の表現には『漢書』の「枚臯傳」にある「臯亡至長安曾赦上書北闕自陳枚臯之子、上得之大喜召入見、待詔、臯因殿中、詔使賦平樂觀、善之、拜爲郎」の一文、つまり漢の枚臯が長安に至り、北闕に上書して枚臯の子と名乗り出て賦頌を試みられたという自薦運動をした人間のエピソードが踏まえられている。この故事は『蒙求』にも「板臯詔闕」という標題で採られている。この話をうけて元稹は八句目で「警然塵念到江陰」と表現したものと思われる。ここでこの元稹の詩の通釈を試みると次のようになる。「一年の中で仲秋の今日、月はとりわけ美しさに満ちている。ましてや、此の卑湿の地、江陵においては空は煙をこめたようにかすみがちでその中で月の美しさをめでようとするのが、いかに

切実なものかわかってくれるだろうか。この月夜、僕のいる金鳳台の前の水は波が漾漾と漂っている。一方君のいる長安の翰林院の玉簾の月影は深い夜色に吸い込まれていることだろう。恒例の事として長安では仲秋の名月をめでのに宴が催され、これが月の動きにあわせて（時間の経過とともに）明るい所へと場所を移しては蘭の生えている道を清めていることだろう。一方で、美しいこの仲秋の名月をめでの新しい詩の要請が頻りに君ら翰林学士に行なわれていることだろう。（そうした君と違って長安のこのような宴に出る術もない今の僕である事よ）。どうして枚臯は天子の召し入れにあずかる機会を得ることが出来たのだろうか。ふと今の僕に名利を求める俗っぽい気持ちが頭をよぎるのである。（一刻も早く長安に戻ることが出来るにはどうすればよいのか、ふと枚臯の故事が脳裏をよぎるのである。）」

ここで道真の詩との比較に移る。まず気付くことはこの元稹の詩内容が道真のそれと全般にわたって類似しているように思える点である。少なくとも先に挙げた白詩の内容より類似点が多く見出せる。それは白居易が翰林学士として長安に居るのに対し、元稹は貶せられて卑湿の地江陵に士曹参軍として客居生活をしているという状況が、讃岐守としての道真の状況と相似しているという詠作背景の類似に拠る所が大きいからであろう。その中でもとりわけ、元稹の詩句が道真の詩に直接投影されて

いるものは指摘できないものの、発想的には、元稹の詩五句目の「宴移名處清蘭路」が道真の詩五句目「舞非春夢難行見」に又、元稹の詩六句目「歌待新詞促翰林」が道真の詩六句目「歌是昔聞便臥吟」に少なからず影響を与えている箇所ではないかと看做せる。別な言い方をすれば道真は元稹のこの表現を意識して自作の表現に生かしたと考えられるのである。

故に、この道真の詩を考察する時に、語句の類似として白詩の「三五夜中新月色／二千里外故人心」を挙げるのは明らかであるにしても単に白詩からの表面的な撰取例として論じるのは疑問が残る。つまりこの白詩が元稹の詩との唱和詩であることを考慮しつつ両者の詩内容を吟味すると、この二者の詩内容が道真の詩の中に見事に融合して撰られているのに気付くのである。そこから白詩のみならず元稹の詩が、唱和詩という事にもよるが、同時撰取されている事例としてこの道真の詩をとらえてみたいである。次章で更に、もう一作品取り挙げ、その考察を深めてみたい。

三

『菅家文章』巻四所載「聞群臣侍内宴賦花鳥共逢春、聊製一篇寄上前濃州田別駕。」の詩を以下挙げる。

285 聞群臣侍内宴賦花鳥共逢春、聊製一篇寄上前濃州田別駕。

花不含靈鳥不言 ○●○○○●●○
知春爲政調寒溫 ○○○●○○○
幽溪轉感求賢詔 ○○○●○○●
古木方驚養老恩 ●●○○○○○
望鶴清飛千万里 ●●○○○○●
思梅艷發九重門 ○○○●○○○
裏香低翅風莎地 ○○○●○○●
爭得時來入禁園 ○●○○○○○
※○は平韻を、●は仄韻を、◎は韻字をあらわす。以下同じ。

(訓)

花は靈を含まず 鳥は言はず
知りぬ 春の政を爲して 寒溫を調へむことを
幽き溪も轉た感ぶ 賢きひとを求むる詔
古き木も方に驚く 老いを養ふ恩み
望ましくは 鶴の晴れて 千万里を飛びなむことを
思はくは 梅の艷はず 九重の門に發きなむことを
香を裏み 翅を低る 風莎の地
争でか時來りて禁園に入ること得む

※本文・訓ともに岩波古典文学大系本に拠る。

一章で既に触れた事だがこの詩は義父の嶋田忠臣との唱和詩であることから次に嶋田忠臣の詩を挙げてみる。

押韻韻目
上平声の元韻

133 奉酬讚州菅使君聞羣臣侍内宴賦花鳥相逢春見寄什 次韻

未堪芬馥應綸言 ●○○●●○○●
 豈是籠禽詩思溫 ●●○○○○●●
 南郭槁株初著艷 ○●●○○●●●
 北山傷雀擬酬恩 ●○○○○●○○
 君魂花發馳宮掖 ○○○○○●●●
 我意鷗飛到海門 ●●○○○○●●
 可惜翰華兼綵鳳 ●●○○○○●●
 逢春不得共林園 ○○○○○●○○

押韻韻目
 上平声の元韻

(訓)

未だ芬馥の綸言に應ふるに堪へざれども
 豈は籠禽ならむや 詩思温かなり
 南郭の槁れたる株 初めて艶を著す
 北山の傷める雀 思に酬いむとす
 君が魂 花と発きて 宮掖に馳せむ
 我が意 鷗と飛びて 海門に到らむ
 惜しむべし 翰華と綵鳳と
 春に逢ひて 林園を共にすることを得ざるを

※本文・訓ともに『田氏家集注』巻之下（小島憲之氏監修）に

拠る。

まず道真の詩から考察を始めた。三句目「幽溪轉感求賢詔」の表現中「幽溪」の説明について川口久雄氏は「太公望呂尚が渭水にかくれ、四皓が商山にかくれ、傳説が傳巖にすみ、巖光が巖陵瀬にすんでいたような故事を下に、賈嵩の賦『遺賢谷に在り』という発想に拠る。自ら讚州の江辺にあつて、天子求賢のよびごえを待望する意をこめる」（注一〇）と考察されている。ただここでのこの語の典故としては先ず『詩経』の「小雅・伐木」を挙げる必要があるのではないかと思う。該当部分を以下引用してみると「伐木丁丁 鳥鳴嚶嚶 出自幽谷 遷于喬木 嘯其鳴矣 求其友聲 相彼鳥矣 猶求友聲 矧伊人矣 不求友生 神之聽之 終和且平」の箇所である。高田眞治氏の解釈によると「山林で木を伐る音がかーんかーんとあちこちに響き渡り、その丁々の音に応ずるが如くに、鳥が相和らいで鳴いている。これらの鳥は、寒い冬の間に居た深い谷間から出て来て、高い木に渉り棲み春に会うて雌雄相和らいで鳴いているのである。あの鳴いている鳥を、とっくり見ると、鳥でさえも、友を求めて恋しい鳴き声をしているではないか。ましてや人間として友を求めないで居られようか。神もこれを聴いたならば、長く和らぎ且つ平安であることを祝福するであろう。神の祝福を祈り求めるのである」とある。「詩序」には「伐木は朋友故旧を燕するなり。天子より庶人に至るまで、未だ友を須たずして

以て成る者有らず。親を親しみて以て睦^{むつ}じく、賢を友として棄てず、故^こ旧を遺^ひれざれば、則ち民徳厚きに歸す」とある。(注一一)

この道真の三句目の「幽溪」にはこの『詩経』の一文「鳥が雌雄相求めるように人間も友を求めないわけには行かない」の主旨を「春を迎え鳥と同じように、天子も賢者を世に広く求める」意に連用し、その意を含ませているものと考えたい。

次に五句目の「望鶴晴飛千万里」に移る。この句中の「鶴」について川口久雄氏は「搜神後記にいう、丁令威が化して鶴となり、千年後に自分の旧里に帰った故事を思いよそえて、自分も晴れて京に帰還し、中央の要職につきたいとの意をこめる」(注一二)と説明されている。一方、この「鶴」には三句目の「幽溪」で論及したようにここでも『詩経』の「小雅、鶴鳴」の一文を見逃すわけには行かない。以下該当部分を引用してみよう。「鶴鳴于九臯^こ 聲聞于野 魚潜在淵 或在于渚 樂彼園池 爰有樹檀 其下維藿 它山之石 可以爲錯」高田眞治氏の解釈によると「鶴が山中の奥深き沼沢にて鳴く。その声が野まで聞こえる。鶴は鳥中で最も高貴な者である。山林に隠居する賢者は、聞達を求めないが、その声誉が自ら遠くまで伝わることに喩えたのである。魚は寒気をさけて深い所へぐりこむ。或いは渚に出て、浅い所に来て遊ぶ。隠居する賢者の出所に喩えたのである。彼の楽しむ園には檀が有り、その下には落葉が鋪いている。他山の石は玉を磨くによい。賢者を用いるのは、自

国の旧臣世家の者に限らない。他邦他族の者であっても、賢才は挙げ用いて、己の国を治めるに役立たしめねばならぬ。」とある。(注一三)

つまり、この句にも「天子の求賢の要」が込められているものと看做したい。そうした『詩経』の「伐木」や「鶴鳴」の内容を響かせているからこそ道真の八句目「爭得時來入禁園」の表現が生きて来るのではないだろうか。

ここでこの道真の詩の通釈を川口久雄氏の注に拠りつつ試みると「花は靈^{たま}しき力をもつものではなく、鳥もまた言葉を出しても言うことはしないが(花が開き、鳥が鳴くのを見れば)春が万物を治めようとして寒温を調えていることがよくわかる。幽谷の奥深くに居て君が賢人を天下に求めて人材を登用しようという詔勅を拝していたく感慨を催す。古木も、君が養老の恩旨を拝して驚き感奮するであろう。鶴が晴天に乗じて高く千万里を雄飛する姿を望み見たいものだ。梅をば九重の宮居の門辺に早春第一のすばらしくかわしい花を咲かせたいと思う。梅の匂いを包みかくしてあらわすことなく、鷗は翅を低れたまま飛翔しない、この海の風が吹きすさぶ海辺の砂地にいる私は、いったいいつになったら宮中に迎え入れられる機会を得ることが出来るのだろうか。」となる。

構成上から注目しておきたいのは、詩題にある「賦花鳥共逢春」の「花」と「鳥」の語意を三、四句目の箇所、五、六句目の箇所と韻の対のみならず、句意にもこの二語をうまくかし

て整然と対句をなしている点である。つまり三句目の句意が「鳥」のことを、四句目の句意が「花」の事を、ここで「鳥」と「花」の対。又五句目の句意が「鳥」の事であり、六句目のそれが「花」の事というように「鳥」と「花」の対が施されているのである。こうした構成は次に取り挙げる嶋田忠臣の唱和詩にも同様の指摘が出来る。

次に嶋田忠臣の詩に考察に移る。この詩については小島憲之氏監修の『田氏家集注』『巻之下』に新聞一美氏による詳細な作品分析が公にされており、今回はこの学恩を受けつつ道真との唱和詩であることに注視して若干の私論を展開してみる。この詩は藏中スミ氏の「島田忠臣年譜覚之書」（注一四）によると、忠臣六十二歳の時の作とある。更に新聞一美氏の考証によると「二年前に美濃介の任を終えて帰京しつつも新たな官を得られず放還を待つ身だった」（注一五）とある時期の詠作である。

まず音韻上では「次韻」と注されているように、道真の詩の脚韻「言」「温」「恩」「門」「園」の五字を忠実に自己の詩に使用している。ここでこの詩の通釈を新聞一美氏の論述の中から引用すると「いまだみかどのお言葉にお答えして美しい花を咲かせることができない（良い詩でお答えできない）」といっても、どうして閉じ込められたかこの鳥でありましょうか。われわれの詩心は春のあたたかさを持っている。南隅にひっそりと住むあなたはようやく花咲こうとし、北山で傷ついた雀のよ

うな私は何とかみかどの恩に報いようとしている。あなたの魂は宮中に馳せ参じて、詩の花と開き、私の心は鷗のように飛んで、あなたのいる瀬戸へ到るでしょう。惜しむべきは、花と開く素晴らしいあなたの詩と鳳凰のようなあなたが、春が来たとしても禁中の内宴に場を与えられないことを。」とある。

（注一六）

ここで道真の詩との比較を通して内容を分析して行きたい。

まず三句目の「南郭槁株初著艶」は道真の四句目「古木方驚養老恩」を承けているもので、特に道真の「古木」を「槁株」と同義語で表現している。一方、四句目の「北山傷雀擬酬恩」は道真の三句目「幽溪轉感求賢詔」を承けていると思われる。道真が「春になり鳥が雌雄相求めるように天子が世に賢者を頻りに捜し求める」と『詩経』の「伐木」を響かせながら自分のような避地にいる人間を早く京に戻して欲しいという意を含めた表現内容を忠臣は「北山傷雀」に放還されない傷心の自分の姿を託し『続齊諧記』に見える雀の報恩譚を響かせ「春の日のように寛大で、ひろく行きわたっているこの天子の恩に一刻も早く何とか報いたい」と暗に仕官を希求する意を含めた表現で承けている。次に道真が五句目で「望鶴晴飛千万里」と詠んだのを受けて忠臣は六句目で「我意鷗飛到海門」と詠む。これは道真が『詩経』の「鶴鳴」を響かせながら「鶴」のような大きなはばたきの中に京での自分の活躍の場を願う心情を含めている内容を忠臣は「鷗」となって「あなたの住む讃岐に飛んで行き

傷心のあなたを慰めたい」と道真を思いやる句作りで応えている。道真の六句目「思梅艶發九重門」を受けて忠臣は五句目で「君魂花發馳宮掖」と詠んでいる。そして道真の七句目、八句目の「褒香低翅風莎地／争得時來入禁園」を忠臣は同じく七、八句目で「可惜句華兼綵鳳／逢春不得共林園」と応えている。特に道真の七句目の語「褒香」（梅の匂いをつつみかくして表にあらわすことのないこと）を忠臣は「翰華」（美しい花）と。

又「低翅」（翅を低れたままの鳥）を、忠臣は「綵鳳」（いろいろどりの美しい鳳凰）と、意図的に道真を慰め励ます表現に換置している。又、道真が「争得時來入禁園」と今の不遇の我が身を嘆いている心情を承け、忠臣は七、八句目で道真の今の境遇に自分の姿をダブらせつつ同情の念を表明していると思われる。

四

さて、ここで再度道真の詩の七句目「褒香低翅風莎地」の表現及び忠臣の詩六句目「我意鷗飛到海門」の表現内容に注目してみたい。道真の七句目の「褒香」は前の六句目の「思梅艶發九重門」を承けて今の自分の心情を喩えた表現である。「低翅」は五句目の「望鶴晴飛千万里」を承けて「風莎の地」で「低翅」する鳥に今の自分の姿を喩えている表現であるとすれば「低翅」とは「鶴」の事であると看做すことも出来る。

しかし、この「低翅」という語を道真の他の作品中に検索す

ると「晩春遊松山館」（『菅家文草』卷三所載）の五句目に「低翅莎鷗潮落暮」と酷似した表現があることに気付く。この詩は一章でも触れた先稿（注一）に詳述した。ここでは、この道真の五句目の表現に次に白居易と元稹の唱和詩の投影があるのではないかと私見を述べた。重複するが再度ここに両者の詩を挙げてみる。

元稹の詩

649 寄楽天

莫嗟虚老海墻西。
天下風光數曾稽。
靈泥橋前百里鏡。
石帆山噴五雲溪。
冰銷田地蘆錐短。
春入枝條柳眼低。
安得故人生羽翼。
飛來相伴醉如泥。

（『元氏長慶集』卷二十二）

〈訓〉

嗟くこと莫からん海墻の西に
虚老するを
天下の風光曾稽を數ふ
靈泥橋前 百里の鏡

白居易の詩

2327 寄微之見寄 時在郡樓對雪

可憐風景浙東西。
先數餘杭次會稽。
禹廟未勝天竺寺。
錢湖不羨若耶溪。
擺塵野鶴春毛暖。
拍水沙鷗濕翅低。
更對雪樓君愛否。
紅欄碧甃點銀泥。

（『白氏文集』卷五十三）

〈訓〉

可憐の風景 浙東西
先づ餘杭を數へ次に會稽
禹廟は未だ天竺寺に勝らず
錢湖は若耶溪を羨まず

石帆山吟 五雲の溪
氷田地に銷じ 蘆錐短く
春枝條に入りて柳眼低る
安くんぞ故人の羽翼を生じ
飛來して相伴に酔ひて泥のご
とくならんを得んや

塵を擺する野鶴 春毛暖に
水を拍つ 沙鷗 濕翅低る
更に雪樓に對す 君愛するや
否や
紅欄碧甃 銀泥を點ず

*作品番号は英房英樹著『白氏文集の批判的研究』による。
本文は中文出版『元氏長慶集』に従い、訓みは、筆者試読のものを、小島憲之先生に助言を仰ぎ、再考したものである。

*作品番号は英房英樹著『白氏文集の批判的研究』に従い、本文は那波本『白氏文集』に従う。訓みは佐久節訳解『読国訳漢文大成・白楽天詩集三』に拠る。

白詩の五、六句目「擺塵野鶴春毛暖／拍水沙鷗濕翅低」の表現に注目してみたい。この白詩の表現が道真の句作の中で生かされている事は今回取り挙げた道真の詩より以前に詠作された「晩春遊松山館」で既に明らかになった。とすれば今回の道真の詩の七句目にある「低翅風莎地」の表現中の「低翅」が意味するものは「鶴」ではなく「鷗」と見る方が合点が行く。

ここで嶋田忠臣の詩の六句目に視点を移してみる。「我意鷗飛到海門」の表現は何を意味するものであろうか。讃岐の風物として「鷗」を象徴的に使ったと考えることも出来ようがこの詩が道真との唱和詩であると考えた場合、又異なる取らえ方も可能になってくる。つまり、道真の五句目「望鶴晴飛千万里」の表現に込められている「鶴」に託した心情と七句目の「褒香低翅風莎地」に込められている屈折した讃岐での今の道真の心情を思い量り「我意鷗飛到海門」と表現して慰めているものと考えられるのである。ここで忠臣が「鷗飛」と明確に「鷗」の語を使っているのは道真の七句目にある「低翅風莎地」の「低翅」が白詩の表現を踏まえた「鷗」であるという共通認識が、道真、忠臣両者にあったことを物語っている。更に興味深いのは、この白詩が元稹との唱和詩であることから前述した元稹の詩句内容、特に七、八句「安得故人生羽翼／飛來相伴醉如泥」（君に鳥のように羽翼が生え、僕の所に飛んで来て、酒を飲みかわしながら旧交をあたためあい泥のように酔いつぶれる時を持つ事がどうしたらできようか。）の表現内容を忠臣が「我意鷗飛到

海門」(私の心は鷗のように飛んであなたのいる瀬戸へと到るでしょう)の「我意」に響かせているのではないかと考えられる点である。もしそうであれば讃岐の地で鬱屈した日々を送っている道真に心底から同情し、その心情を慰問したい忠臣の気持ちだが、白居易に寄せる元稹の心情になぞらえてより明確になってくるのではないかと考える。

五

以上、道真の「正月十六日憶宮妓鬪歌」とこの道真、忠臣二者による「賦花鳥共逢春」をめぐるの唱和詩は、白居易・元稹の両者の詩が同時撰取されている例証として前稿で取り挙げた道真の詩「晩春遊松山館」に引き続いて好例を呈しているものと考えられる。

このことから、白居易の詩からの投影関係が論じられて来て久しくなるが、白居易との唱和詩である元稹の作品も同様に平安朝の漢詩人達に享受されてきた一端を、菅原道真、嶋田忠臣の詩を通して多少なりとも明らかにすることが出来たように思う。

注一 拙稿「菅原道真の詩に投影されている白居易・元稹

の詩について(その一)

―『菅家文章』巻三所載「晩春遊松山館」の解釈を

めぐって―」(「九州大谷国文」第二十三号)

注二 小島憲之監修『田氏家集注 巻之下』一三頁

注三 岩波日本古典文学大系『菅家文章・菅家後集』補注六九三頁

注四 岩波日本古典文学大系『菅家文章・菅家後集』頭注三三三頁・補注六九三頁

注五 岩波日本古典文学大系『菅家文章・菅家後集』頭注一三三三頁・補注二六九三頁

注六 岡村繁著『新釈漢文大系 白氏文集三』一一九頁「解題」を引用した。

注七 岡村繁著『新釈漢文大系 白氏文集三』一二〇頁

注八 岡村繁著『新釈漢文大系 白氏文集三』一二〇―一二二頁「余説」

注九 『元稹研究』花房英樹・前川幸雄著年譜二四頁

注一〇 岩波日本古典文学大系『菅家文章・菅家後集』補注
二 六九四頁

注一一 高田眞治著『漢詩大系 詩経下』三五頁・三七頁

注一二 岩波日本古典文学大系『菅家文章・菅家後集』補注
三 六九四頁

注一三 高田眞治著『漢詩大系 詩経下』一〇四頁

注一四 小島憲之監修『田氏家集注 卷之上』三〇一頁

注一五 小島憲之監修『田氏家集注 卷之下』一三頁

注一六 小島憲之監修『田氏家集注 卷之下』一八頁

(一九九六年十月二十六日 執筆了)

(大学院第七回修了・有明高専)